

第六十五回神田古本まつりの収穫（坤）

土屋 博

十二「少年倶楽部 昭和五年十一月號」本體

及附録「繪本太閤物語」（澤田謙文、明石弘志畫）

（大日本雄辯會講談社、昭和五年十一月一日發行、本文三〇五頁）

古書價格本體、附録、各六百圓也。立志奮闘出世くらべ號と題し、たとへば、野村胡堂は、朝鮮の仁川の旅館にて、宮城道雄少年（一八九四年生れ、一九五六年歿）、伊藤博文公（一八四一年生れ、一九〇九年歿）の前にて自作の新作箏曲「水の變態」を奏したる様子を活寫す。

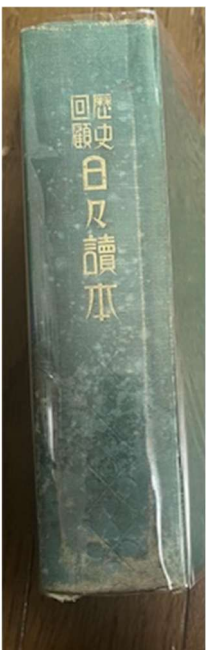
附録冒頭部分より、『日輪が體内に宿ると夢見て生れたからと名づけた日吉丸。どんな可愛い子が生れたと思ふと、まるで猿だ。』と。



十三「歴史回顧 日日讀本」馬場峰月編著

（國民教育會藏版、昭和七年五版、定價金參圓五拾錢、七五八頁）

古書價格三百圓也。初版は昭和六年。卷頭言に曰く、「本書は一年間の各日に於ける歴史的事實を記述し、その日の回顧の料に供するを目的としたるものなり」と。たとへば、十二月二日については、①モンロー主義の宣言（一八二三年）、②細川忠興歿す、年八十三（正保二年）。



十四「人間山陽と史家山陽 校正刷」徳富蘇峰著

(昭和七年頃、和綴 私家本)

古書價格五百圓也。出版前の校正刷なり。蘇峰の祕書的存在ともみゆる池上生の朱筆訂正は、一言一句ゆるがせにせず、微に入り細を穿ち、「全部今一校を要す」とあり。成實堂文庫用箋を使用したれば、蘇峰関係者のものなりと斷定することを得。



十五「佐々木・武田氏 新制 新撰女子國語讀本 辭書 七卷」

(日本辭書株式會社、昭和十三年刊、新版記念特價金參拾五錢、一九〇頁)

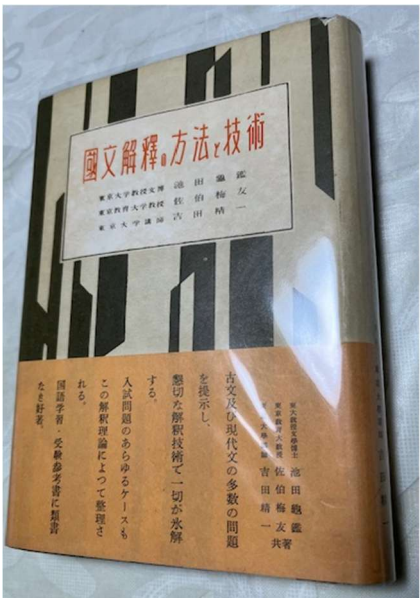
古書價格百圓也。教科書準據のいはゆるアンチヨコなり。「國體の明光」(三上參次)、「吉野の行宮」(神皇正統記)、「妹に與ふ」(吉田松陰)、「月の夜」(樋口一葉)、「重盛の諫言」(平家物語)、「配所の月」(大鏡)など。



十六「國文解釋の方法と技術」池田龜鑑・佐伯梅友・吉田精一共著

(至文堂、昭和二十八年刊、定價金貳百七拾圓、三六三頁)

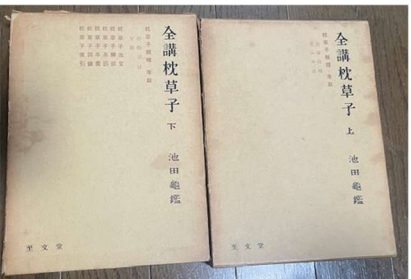
古書價格三百圓也。源氏物語桐壺よりの引用例文は、「繪にかける楊貴妃の容貌(かたち)は、いみじき繪師といへども、筆限りありければ、いとほひ少なし」。



十七「全講 枕草子 上下」池田龜鑑著

(至文堂、昭和三十二年再販、定價各八百圓、合計七七二頁)

古書價格、二冊にて五百圓也。函入。序に曰く、「枕草子を讀めば讀むほどこの作品に深い興味を感じ、あのめまぐるしい歴史の激流に生きた作者に強く心を惹かれ、いつの間にか憧憬を抱く様になつた」と。下巻には、系圖、年表、圖録、索引も収録す。



十八「國民の文學 第十卷 平家物語」

(河出書房新社、昭和三十八年刊、定價三百九十圓、五一六頁)

古書價格二百圓也。函入。中山義秀譯の平家物語。井伏鱒二譯の保元平治物語も収録す。

「祇園精舎の鐘の響は萬物流転のつねならぬ世の様をつたえ、白じろと散る沙羅雙樹の花の姿は榮える者のかならず滅びゆく道理をつげる」と。



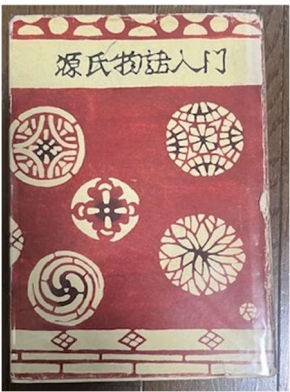
十九「源氏物語入門」富倉徳次郎著

(小峯書店、昭和四十二年刊、定價七百八拾圓、四二〇頁)

古書價格二百圓也。富倉徳次郎(一九〇〇年生れ、一九八六年歿)は、第二高等學校理科、東京帝大理學部を経て、京都帝大國文科卒。戦後駒澤大學教授。平家物語の權威として知ら

る。

序に曰く、「そもそも源氏物語はそぞろごとである。几帳のかげで十二単衣の姫君が侍女の讀むのをしみじみと聴き入った物語なのである。」と。

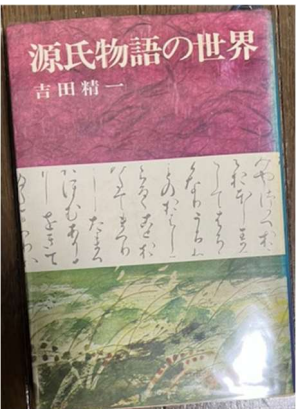


二十「源氏物語の世界」吉田精一著

(秋田書店、昭和四十四年刊、定價五百八拾圓、二五二頁)

古書價格二百圓也。吉田精一(一九〇八年生れ、一九八四年歿)は、一高、東大國文科卒、東京教育大學教授を経て東大教授。

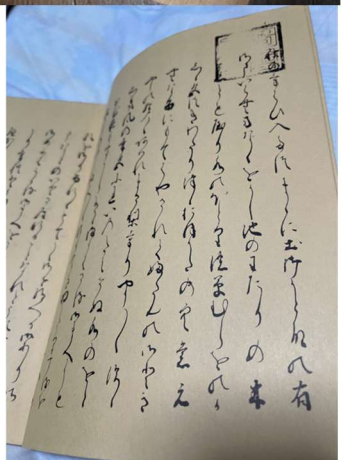
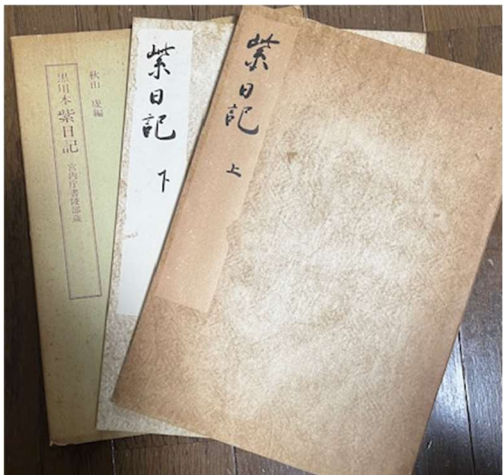
はじめに曰く、「源氏物語はまだまだ一般化されていない。専門の國文學者と稱する人々のうち、原典を古注によつて吟味しつつ讀み通した者が幾人いるか」と。



二十一「黒川本 紫日記 上下 宮内廳書陵部藏」秋山虔編

(笠間書院、昭和四十七年復刻、定價千二百圓)

古書價格百圓也。宮内廳藏の紫式部日記。くずし字のため解讀は容易ならず。寛弘五年(一〇〇八年)秋より翌々年正月までの記録なり。



二十二「古典への道案内」齋藤雅子著

(三一書房、一九七八年刊、定價千四百圓、三一八頁)

古書價格二百圓也。齋藤雅子(一九三一年生れ、二〇〇四年歿)は、都立大佛文科卒、共同通信記者を経て文筆家。

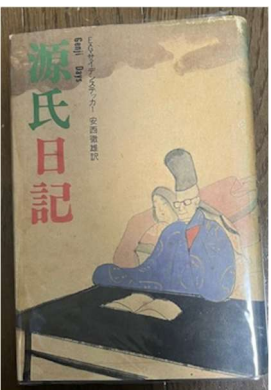
本書は、古典の梗概を知るに極めて有用。中古及び中世部分は、一九七七年公明新聞學藝欄連載、上代部分は書き下ろし。



二十三「源氏日記」サイデンステッカー著

(講談社、昭和五十五年刊、定價千四百圓、三〇九頁)

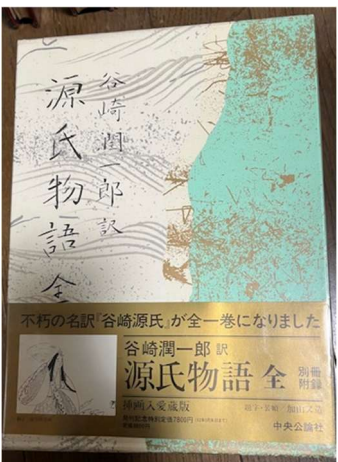
古書價格二百圓也。一九七〇年十一月十日の日記より、「與謝野晶子譯と谷崎潤一郎譯の相違は、動詞の活用と、どの程度曖昧さを残そうとするかの二点に帰著する。晶子はウェイリ―譯同様にきつぱりとした動詞の形で終る。一方、谷崎は原文と同じ程度に曖昧さを残すと。」



二十四「谷崎潤一郎譯 源氏物語 全」

(中央公論社、昭和六十二年刊、定價八千八百圓、一六九二頁)

古書價格二千九百七十圓也。昭和三十九年より四十年にかけて刊行せられたる「新々譯」を昭和六十一年に一冊本として刊行したるもの。題字、裝丁は加山又造畫伯。附録の「隆能源氏物語繪卷」の全圖及び解説は貴重なりと覺ゆ。また、北村久備「すみれ草」に準據せる年立も活用すべし。

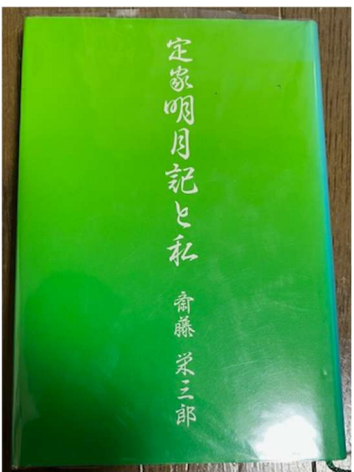


二十五「定家明月記と私」齋藤榮三郎著

(ヒューマンドキュメント社、昭和六十二年刊、定價二千八百圓、二四五頁)

古書價格二百圓也。齋藤榮三郎(一九一三年生れ、二〇〇〇年歿)は、早稲田大學商學部卒、日經新聞記者を経て、參議院議員、科技廳長官。「太平洋戰期における日本經濟の實證的研究」により商學博士(早稲田大學)、「賠償の實證的研究」により法學博士(中央大學)、「イラムの社會思想」により文學博士(東洋大學)。

昭和二十年六月、日經新聞シンガポール支局長兼陸軍報道班時代に藤原定家を読み、「明月記」は心の支へとなりたる由。保元の亂により公卿社會の崩壊して行く時代を生き抜きたる定家は、血みどろの生活を送りけりとぞ。

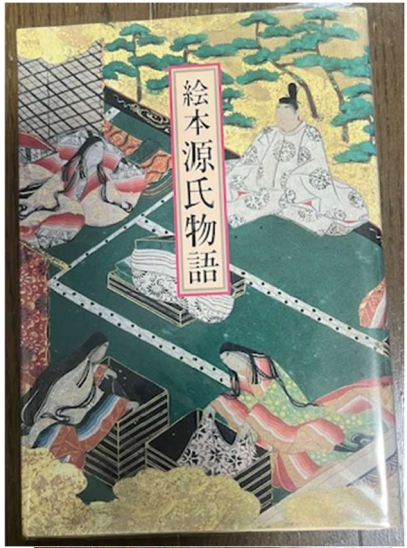


二十六「百人一首」神作光一著

(櫻楓社、令和三年刊、定價三千八百圓、一一九頁)

古書價格五百圓也。底本は、文化五年刊、芝山持豐筆、土佐光貞畫。

稀觀本の美しきカラー複製なれば、二度目の購入と相成れり。著者は元東洋大學學長。



二十七「繪本源氏物語」

(日本古典文學會、一九九二年再版、定價二千圓、三二〇頁)

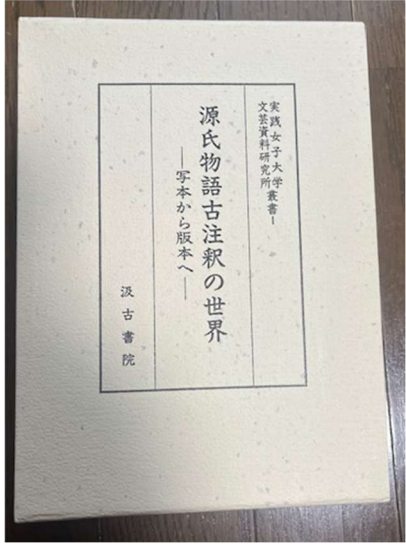
古書價格五百圓也。底本は、東京大學國文學研究室藏。餘りに美しき本なれば、二度目の購入。初版は一九八八年。



二十八「源氏物語古注釋の世界」

(汲古書院、平成六年刊、定價一萬二千圓、本文五〇九頁)

古書價格千五百圓也。實踐女子大藏の「覺勝院抄」桐壺卷の翻刻を含む。



(令和八年一月十二日受附)